

2020年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第十四主日礼拝
「神の愛の現実に生きる」ルカによる福音書 17:1～10

【聖書】

ルカ福音書 17:1 イエスは弟子たちに言われた。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。² そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。³ あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。⁴ 一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

⁵ 使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、⁶ 主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

⁷ あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。⁸ むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。⁹ 命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。¹⁰ あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

1 広告型政権

安倍首相が電撃辞任しました。約8年間続いた長期政権を「広告型政権」と言った人がいます。生々しい現実を美しく恰好いいイメージで覆い隠していい広め、人々の支持を得ていたという意味のようです。教会の宣教も、このように広告や宣伝をすれば、多くの人々が神さまやイエス様を支持するようになるのではないかと、いう人達があります。教会は勿論神の愛をこの世に宣べ伝える努めがあります。しかし、現実を覆い隠してよい所ばかりを言い立ててよいものではありません。キリストに救われ神の愛を宣べ伝える為に集められた教会の中であってイエス様を「主よ、主よ」と呼びつつも、実際には、イエス・キリストの教えとは真反対の事をしてしまうし、周囲もそれを許してしまう。そうして、キリスト者同士の交わりを、罪に満ちた人間の交わりと変えてしまう、それは実際にあることです。そのような私達に対して、主はなんと仰っているのでしょうか。イエス・キリストの愛によって救われた私たちは、この現実をどのように考えどのように行動すればよいのか、その指針が記されているのが、今日の聖書テキストです。主イエスはエルサレムの旅、十字架への旅の間、そのような現実

に打ち勝つ術を、ペトロをはじめとした弟子たちに伝えようとされたのです。それは今を生きる私たちをも、教え導くものです。主イエスの弟子たちへの言葉に聴きこの言葉に生きる事こそ、教会をまことのキリストの体としてたて上げていきます。これは教会にとって大事なところですから、今週と来週の二週に渡って、主イエスの恵みの教えに耳を傾け、心を集めたいと思います。

2 躓き

主は最初にこうおっしゃいます。「**つまずきは避けられない。**」躓きというのは、動物を捕まえる罠から派生した単語です。動物をするどい刃で傷つけ捕えてとじ込め、身動きさせなくする罠。神に作られ愛されたという人間の本性を傷つけがんじがらめにして動けなくしてしまう躓きの正体は何でしょうか。罪です。「つまずき」というのは、人が神から遠く離れてしまう罪をもたらすものと言えます。ですから、主はここで、「罪への誘惑は、避けられない」と仰っています。現実的な言葉です。

この主の言葉から、思い出す言葉があります。ナチス・ドイツと戦ったルター派の牧師であり神学者であるボンヘッファーの「**キリスト者の兄弟姉妹の関係は、一つの理想ではなく、神の現実だ**」(交わりの生活 p14)という言葉です。信仰を持った当初、人は、信仰者の交わりについて美しいイメージを抱くものです。しかし、現実とは違います。神ならぬ身の信仰者は、皆それぞれに弱さや愚かさをもって、神なきこの世を生きていますから、罪と無縁でいる事は本当に難しいのです。だから、教会にも、嫉妬や嫉み、憎しみがあり、仲間を貶めたり、裁きあったりする現実があります。人間が信仰者の交わりに抱く理想は、もろくも打ち砕かれる理想なのです。

3 私達を一個の存在として受け止める神

それにしても、どうして天の御神はこのように、キリストを信じる人々の間にさえも入り込む罪の現実を、そのままにしておられるのでしょうか？全知全能の御神であれば、私達の罪を清めて取り去ってしまう事など容易い筈です。そうすれば、私たちは罪と闘う必要もなく、この世もイエス・キリストを信じやすくなり、宣教も伝道も容易に進み、神の国はすぐに実現するでしょう。

しかし、神は敢えてそうはなさいません。もし神が強制的に私たちから罪を取り去るという事は、私たちを意志のないロボットのように扱うという事なのです。ですが、神は私たちをロボットのようにお造りになりません。先週から礼拝後の聖書を読む集いを始めていますが、旧約聖書の創世記では、神が人間を造ったことを次のように描いています。「**神はご自分にかたどって人を創造された。**」(創世記1:27)、「**主なる神は土で人を形作り、その鼻に命の息を**

吹き込んだ。人はこうして生きる者となった」(創世記 2:7)。神は私たちを、ご自身と対話できる者、神と交わりを持つ事ができる者、人格を持つ者としてお造りになったのです。つまり神は私達に自由をお与えになった、神に叛き罪を犯す自由も神に従う自由も、神を愛する自由もお与えになりました。そこには、私達を、物ではなく自由意志を持つ一個の存在として尊ぶ神の愛があります。ボンヘッフアーが、「キリスト者の兄弟姉妹の関係は、神の現実である」と言ったのは、確かに罪が紛れ込む現実ではありましたが、裏を返せば、罪を犯す自由さえも与える「神の愛の現実」ともいえます。だから、主イエスは仰るのです。「つまずきは避けられない。」、人が罪を犯す事は避けられない、背後に神の愛の現実と、人の罪の現実があるからです。

4 ウーアイ

しかし、父なる神が、そして主イエス・キリストがそれを決して喜ばれているわけではない事は明らかです。「だが、躓きをもたらす者は不幸である。そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。」信仰の仲間を罪に誘い神から遠ざけてしまうような者の過ちは取返しがつかない、より深く大きい罪だと主イエスは仰り、厳しい言葉で叱責されています。ですが、そこには主の私達に対する愛が切々とにじみ出ています。「つまずきをもたらす者は不幸である」の「不幸である」という言葉でわかります。もともとのギリシア語は、「ウーアイ」という言葉で、「胸がかきむしられるほど悲しい」という意味があります。「ウーアイ、ウーアイ、私は悲しい。私は悲しい」「私が深く愛するあなたが仲間を罪に誘うとは、何という事か、何と言う事か」、罪を犯す者もその者を罪に誘う者も深く愛するが故に、主イエスは嘆かれるのです。罪を犯してしまう私達は、この嘆きをどう聞けばいいのでしょうか、「私達は罪人なのだから、主イエスが嘆く事は致し方ない」と開き直るしかないのでしょうか。私達はどうすればいいのでしょうか。

5 基本となる神との関係

さて、私の好きな言葉に「人は縦軸と横軸で生きる」というものがあります。「縦軸」とは神との関係であり、「横軸」とは、人との関係。人間は神と人との二つの関係で生きるというのは、真実だと思います。そして、縦軸、神との関係は、横軸、人との関係をも決定する…と言った神学者がいます。私もその通りだと思います。神を神として愛し従えば、周りの人を自分の兄弟姉妹のように愛する愛も与えられていく。神は何よりも他者を深く正しく愛される方だからです。別の言葉で言えば、周囲の人に対して罪を犯す、周囲の人を罪に誘うと

いう場合、そうせずにはすむ事こそ少ないのですけれども、その時、神との関係がどこかおかしくなっているのです。つまり、私たちの周囲の人との関係の根本には、神との関係があります。それは今日のテキストにも現れています。今日の聖書箇所、主イエスは、最初に、躓きの話、罪を犯すこと、罪に誘う話をし、信仰の仲間を戒めて悔い改めたら徹底的に赦す事の大切さを述べました。主は「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」とまで仰います。七回どころか、一回だって罪を犯されたら、私達の心は騒ぎ立つでしょう。一度は「悔い改めます」と言われれば、喜んで赦すかもしれません。しかし、それが二回、三回と重なれば、いくら神妙に「悔い改めます」と言ってきたとしても、到底それを信じる事ができるとは思えません。「いい加減にしろ」というのが怒り出すのが正直なところ。ですから、この主イエスの無茶と思える言いつけを聞いた使徒たちが、「そんな事はとてもできない。私ども信仰を増してください」と言い出したとしても、無理からぬ事。しかし、主はそこで、信仰とは無関係に思える主人と僕の譬え話をなさいます。この主人と僕の譬え話こそ、私達が周りの人々と共に生きる事の根本となる「神との関係」を使徒たちに教えておられるものです。

6 主人と僕の譬え話

この譬え話は実に巧妙にできています。最初、聞く者は、自分が主人のつもりで聞き始めます。「あなた方の中に僕がいる者がいたとしたら」と主が語っておられるから。人は、「自分が主人だったら、自分の僕に次々と命令を言いつけるし、僕がその通りにするのも当たり前だ」と、のんびりした気分で聞きはじめます。しかし、9節位で雲行きが怪しくなり、やがて、10節で自分達は僕の立場であり、主人は神であったという事がはっきりします。あらら、最初に「僕は主人の言う事きくのが当然」と思っていたのですから、反論はできません。

7 十字架によって贖われる者

実に巧妙に語られていますが、感心してばかりもいられません。この譬え話の中の「僕」とは、給料で雇われている単なる召使ではなく、奴隷です。現代世界に生きる私達はぎょっとします。奴隷は主人の所有物、全ての自由を奪われ、非人間的な扱いを受ける、搾取され使い捨てられる…そんなイメージを抱きます。主イエスが生きた2000年前の古代世界の奴隷達の中には、確かにそんな悲惨な奴隷も多かったでしょうが、その一方、優れた才能の故に主人に重用され、自由民である一般庶民よりも遥かに重要な働きをし、豊かな

生活を送っている奴隷もいました。ですが、幾ら重用され豊かに暮らしていても奴隷、人間の所有物、自由意志がない事も確かです。主はどうして、神との関係を語るのに、奴隷の譬え話をしたのでしょうか。神が私達人間の自由意志を尊重する…と言った先ほどの話と全く話が違うようです。

ですから、主イエスがここで弟子たちを奴隷に譬えて話をされたのは、これから行こうとしているエルサレムでの主の十字架に深く関係しています。教会では、「私達は、イエス・キリストの十字架で贖われた」という言い方をします。この「贖う」とは、「奴隷として買い取る」という意味があるからです。つまり、「私達は、イエス・キリストの十字架で奴隷として買い取られた者」と教会では繰り返し語られるのです。私達人間は、気づかないうちに自分を神とするか、誰かほかの人物、神ならぬものを神として神に叛く者達。そして、却って自己中心に陥り、人を嫉み憎み、自分に不都合な人を「いなくなってしまう」とさえ思う事から逃れられない、それは罪に逆らえない、罪の奴隷となっている姿。一人の例外もなく人間は罪の奴隷だと聖書は語ります。私もそう思います。人間は自分から自由になることは自力ではできません。しかし、その罪の奴隷であった人間を、神が尊い代価をもって買い取ってくださいました。

どのような代価でしょうか？神の愛する独り子・イエスキリストの命です。神は、ご自身のかげがえのない独り子を私達の代わりに罪人として十字架にむごたらしく処刑させる事によって、私達を罪の縄目から解放し、買い取ってくださりご自身のものとしてくださったのです。十字架は自由民が受ける刑罰ではありません。奴隷が受ける刑罰です。まことの神にてまことの人、罪から全く自由な唯一の方が、罪の奴隷の私たちに代わって奴隷の死を耐え忍びました。私たちが買い取られて神の僕となるためです。そんな事人間が考える事もできないことでした。ですから、主イエスの十字架の贖いこそ、ボンヘッファーの言う「人間の理想ではなく、神の現実」の根本にあるもの。私達は、主イエスの罪から解き放たれ、神の僕、神の奴隷となった者達です。

しかし、父なる御神は、この「神の現実」を受け入れるか否かを、私達一人一人に任せられます。信仰者とは、この神の現実生きるようにと招かれ、この現実を受け入れようと決心した者達です。

8 信仰の逆転

主は奴隷の死を死んで、三日目に王のように甦られました。そして、神の御もとに変えられた後、神の御子の霊、見えないキリスト・イエスが私たちに注がれ、私たちの内に住んでくださいます。この御子の霊がいてくださるからこそ、私達は、この地上で神の僕として生きることができます。だから、神の御子の霊、見えないキリスト・イエスが与えられた時、私達は大きく変えられるのです。先ほど私は、この譬えの中で、主人から僕への立場の逆転が起こってい

ると言いました。この逆転、「自分は主人ではなく、神の僕であった」という気づきこそ、神の御子の霊、僕として生き抜いたキリストの霊が私たちに与えられたことを表している…と見抜いた神学者がおり、私もその通りだと思います。自分を神の主人だと思い、自分の信仰で何かを成し遂げられると思っている者は、神に対して、あれをしてほしい、これをしてほしいと期待して、神に祈るでしょう。それは神をドラえもんのように扱っているのですが、その事にさえ気づきません。自分が主人であると思っている間は、神の地位にいるわけですから、悔い改めの必要も感じません。信仰の仲間だって、自分に罪を犯す者は赦せないし、悔い改めに導こうなんて事を思いもしません。審き排斥して弾劾する事しか考えつかない。そして仲間を悔い改めではなく罪に導く結果となります。

しかし、主イエスはそんな私たちに「あなた達もこれと同じだ」と仰り、自分達が主人ではなく神の僕である事に目覚めなさいと私達を促すのです。それは人間が抱きがちな一つの理想ではありません。人間は自分達が奴隷となる事を理想として追い求めはしないでしょ。しかし、私達は、キリストの十字架によって買い取られた神の僕。これこそ、私達が生きるべき喜ばしき神の現実なのです。この神の現実生きて初めて私達は、自分に罪を犯した人々を戒め、悔い改めに導く事ができます。自分の力ではできません。この事は、私達がまことのキリストの体としての教会を建て上げていく上で、とても大切な事。

9 取るに足りない僕

さて、主は最後にこう言えと命じられます。『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをただけです』。「取るに足りない」と訳されているギリシャ語には、「役に立たない」という意味があります。それが転じて、「利益にならない」「無益なもの」とも訳されています。奴隷は基本的に私有物を持ちません。奴隷のものは、全部主人のものです。ですから、僕の信仰は自分の信仰ではなく、主人の信仰、主イエス・キリストの信仰です。だから、ここで主イエスが桑の木さえも言いつけを聞いて、生えている所を抜け出ても海に根を張る事ができるという信仰は、主イエスの信仰と言えます。主イエスの信仰、主イエスが成し遂げた事なら、私達が誇る必要はないのです。だから、主は仰るのです。『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをただけです』。それは、「私達の行った事は全てあなたの言いつけに従ったもの。その実りは私達のものではなく、あなたのものです」と言うこと。神の僕の成果は、神のもの。

しかし、ひっくり返せば、神の僕として生きること、実に神の実りと言えるほどに豊かなものを私たちは地上でも得ることができるという事です。ウーアイ、ウーアイと主を悲しませるしかなかった私たちが、主イエスを、父なる神を喜ば

せる事ができるなんてすごい事です。神はその喜びのゆえに、終わりの日には、私たち僕をご自身の食卓につかせ給仕をしてくださる…と主イエスは別のところでおっしゃっています。それは、自分自身を主人として生きていては、決して得る事のできない、永遠の喜びです。

10 練習が必要

しかし、それほどの喜びを神に与える僕は、熟練の者。私達が最初からうまくできるわけではないのです。自分がたちどころに熟練した僕となるなんて、人間の抱く理想、幻想です。誰だって最初からうまく歩けた人はいません。記憶にはないけれども、立ち上がって歩くまで必死になっていた筈。神の僕としてもこれと同じであり、練習する必要があります。神の僕として、半人前の私たちは、いつも学び続ける必要があります。学ぶのに特別な神学校に行ったり、難しい本を読む必要なんてありません。私たちの生活の場、罪に満ちたこの世界が学びの場所です。人間関係で悩み葛藤し、愛せない事に苦しみのうち、導きの言葉を求めて聖書を開き、神に祈り求めます。そして与えられる神の言葉という食べ物を味わって力を頂き、私たちは神の僕として成長していくのです。まるで、大木が地中深く根を張るように。神の義なる愛のうちに深く根差す過程とも言えます。

神の現実に生きる術を、知恵を学んでいく。そうして、私達は自分の力では築く事のできない豊かな人間関係、神の愛に根ざした関係をこの罪の世の只中で築く事ができるのだと思います。それが聖徒の交わり、教会の交わりであり、これこそ、神の与えて下さる豊かな報い、実りです。だから、カルヴァンは、「教会は聖霊の学校である」と語りました。「教会は聖霊の学校、見えないキリスト・イエスの学校」これこそ、もろくて壊れやすくつまずきやすい人間の理想ではなく、力強い神の現実です。共に礼拝に招かれている私たちは、横浜ナザレン教会をこのような聖霊の学校とすることに招かれているのです。今、共に神を礼拝しているお一人お一人と共に、この神の僕としての務めを、皆さんと共に果たさせてください、と父なる神に切に願います。